

## ヴィジイノースについて

## 関 本 至

ヴィジイノース (Georgios Vizyinos) は1870年代から1880年代にかけてのギリシアにおける最も重要な詩人且つ散文作家の一人である。ヴィジイノースは1849年に東トラキアのヴィジーイ (VizyiまたはViza) という村で生まれた。ヴィジイノースはヴィジーイの人という意味である。東トラキアは今日もトルコ領、当時はマケドニア、テッサリアなど北ギリシアもまだトルコ領であった。要するにヴィジイノースは19世紀の半ばにトルコ帝国の田舎町で生まれたギリシア人であったのである。

彼は幼少の頃、コンスタンティノーブルに出て洋服店の徒弟となった。二年後にキプロスの大主教ソフロニーオス二世の召使いとして4年間働く。この間、その地の学校 (scholarchio-10才~13才の子供の行く学校) で勉強し、文学的な経験を持つ機会もあったらしい。1872年の夏、コンスタンティノーブルに戻り、ハールキの神学校に入った。そこで、盲目の詩人タンダリージス (Ilias Tandalidis) の教えを受け、多大の影響を被った。

彼の生涯の重要な出来事の一つは、彼が1873年に同郷の富裕な銀行家ザリーフィス (Georgios Zarifis) と知り合ったことである。ザリーフィスはヴィジイノースに学資を出すなど、この人が死ぬときまでヴィジイノースの強力な庇護者であった。ヴィジイノースはザリーフィスの援助でアテネに行き、高校を了えてアテネ大学の哲学部で1年間 (1874~1875) 講義を受けた。

この間、1874年に彼の叙事詩 (“O Kordos”) がヴツィネーオス (Vutsineos) の作詩競技で一等賞をえた。この競技はヴツィナス (Ioanis Vutsinas) の作った作詩競技で、1862年から1876年にかけて、大学評議会の後援の下に、毎年アテネで行なわれた。その後も二回にわたり (1875年、1876年) 彼は同じ競技に入賞している。

ヴィジイノースはザリーフィスの援助で、1876年10月ドイツに留学、ゲッティンゲン、ライプチヒ (ここではヴィルヘルム・ヴントの教えを受けた)、ベルリン (1878~1880) の各大学で学び、1881年には博士論文を書いた。

1882年にパリにゆき、翌年にはロンドンに行った。そこで豪華な詩集を出版した。ザリーフィスの援助によるものである。

ところが1884年に後援者ザリーフィスが亡くなり、ヴィジイノースはアテネに帰り、そこに定住することを余儀なくさせられた。それから後、高校の教師をしたり、鉱山事業に手を出したりしたが成功せず、経済的に苦しい生活を送った。

彼は哲学の本を刊行して大学教授の椅子を望んだがうまくいかず、詩や短編小説や心理学の論文を書いたり、外国作品の翻訳をしたりなどした。

しかし窮乏（とある種の病氣）が神経に障害をもたらすようになった。その中、オディーオン（音楽・演劇学院）の演劇論の教授となって若干の落ちつきをえたが、しかしオディーオンの若い女生徒への恋愛がきっかけで精神病が悪化し、精神病院に入れられ（1892年）、四年後の1896年（4月15日）そこで一種悲劇的な生涯を了えた。

ヴィジイノースは上述のように、詩人であり、散文作家であり、学者でもあった。その散文では短編小説の分野でかなりの成功をおさめている。

ヴィジイノースの短編小説は非常に短い期間の間に作られた。（多分1882年から1886年にかけてである。より正確には1879年に最初のものがある。）8編の作品があるが、そのうち6編が文芸雑誌『エステア』（“Estia”）に載せられた。その6編とは『わが母の罪』（1883年）、『ピレウスとネアポリスの間』（1883年）、『わたしの兄弟を殺したのは誰か』（1883年）、『古い物語りの結末』（1884年）、『彼の人生の唯一の旅』（1884年）、および『モスコヴ・セリーム』（1886年）である。

この中、『わが母の罪』の内容をごくかいつまんで紹介する。

ある田舎町、（おそらくヴィジーイのようなトラキアの町が舞台として想定されているようだ）に、母親と息子三人と末娘一人の一家が住んでいる。父親はこの話が始まる時点ですでに亡くなっている。話は一人称で語られ、語るのとは二番目の男の子である。女の子は病弱で、母親は常軌を逸するほど献身的な看護をするが、娘はどうとう亡くなってしまふ。娘の治療のため金を使い果たし、財産を失くしたのに、やがて母親はよその女の子を養女に迎える。その女の子を溺愛して、結婚までさせるが、まもなくこんどはみなし子の女の子を養女にして可愛がる。亡くなった実の娘に対し、また二人の養女に対してのその常識はずれの溺愛は、語り手である息子にも、またわれわれ読者にも異様に感ぜられるほどのものである。

自分（つまり一人称の語り手）はコンスタンティノープルその他へ出て働くが、一時帰宅したとき、器量も頭もよくないみなし子の養女を母親がむし

ように可愛がるのを見て我慢ができず、そんな子は家から出してしまうようにと母親に迫る。それを聞いて悲しがった母親が《自分》に次のような告白をするのである。

母親には、死んだ末娘の上に実はもう一人女の子がいた。《自分》が生まれる前のことだ。ある日、母親は知人の結婚式に招かれ、夫とともにさんざん楽しくすごして家に帰ったあと、疲れはてて添寝をしていた赤ん坊（女の子）を窒息させて死なせてしまうのである。そしてその罪の意識にさいなまれる。そしてそのあとで生まれた女の子を死んだ子の身代りと思って溺愛するが、さきに述べたようにその子は病死してしまう。神様が罰を与えられたのだと思い、養女をつぎつぎと迎えて罪のつぐないをしようとした — というわけである。

《自分》はその告白を聞いてすっかり母親に同情し、自分の知り合ったコンスタンティノーブルの總主教に告解をさせて母親に罪の赦しを求めさせようとする。告解をして總主教から赦免を受けた母親はしかし一向に救われたような顔をしないでこう言うのである —

「總主教様はなるほど賢明な神聖なお方だ。あの方は神様の一切の御意図と御意思を知っておいでになる。そして世間すべての人の罪を赦される。でも何と言ったらいいか！ あの方はお坊様なのだ。子供をお生みになったことがないから、人が自分の子供を殺すことがどんなことだかおわかりになれないだよ。」

彼女の目は涙でいっぱいだった。《自分》は言う言葉もなかった。 — こういう話である。

わが子を死なせた母親の罪の意識の深さがこの作品のテーマになっていることは言うまでもない。が、それと並んで、教会や聖職者や宗教に対する一種の批判もうかがえるように私には思われる。（瀕死の病人が教会からていよく家へ追い戻される話や、いろいろの迷信的行為の話など）。

ヴィジイノースの短編小説は彼の少年時代の記憶、家族の思い出などでいろどられている。すべて一人称で語られていることからわかるように、つまり自伝的要素が強い。登場人物は、彼の身内（両親、祖父母、兄弟）であったり、素朴なトルコ人であったりする。そしてトルコの田舎の風物が背景をなしている。しかし単にローカルカラーに閉じこもっているのではなく、心理学者として、人間精神の内奥に立ち入り、人間の過誤、死、狂気、行きづまり、などが彼の作品の恒常的なテーマを形成しているのである。彼の作品は民衆的要素と学者的要素、ロマンティックなものと同然主義的なもの、物語的なものとドラマ的なものが結び合わされていると言う人もいる。

ヴィジイノースはよく言われるように現代ギリシア短編小説の父であるとは必ずしも言えない。なぜならランガヴィース（A.R.Rangavis, 1809～92）その他の短編作家が彼に先行しているからである。しかし彼は彼の輝かしい作品をもってギリシア短編小説に新しい道を拓き、1880年の世代に革新的な鼓動をもたらした最初の人だと言える。彼のあとには、パバディアマーンディイス（A.Papadiamantis, 1851～1911）その他の19世紀末の作家がつづくのである。

最後に、ヴィジイノースの作品に用いられていた言語について觸れる。

簡単に言ってしまうと、彼の作品では、地の文は純正語で記され、語り（会話）の部分は民衆語で記されているのである。

例えば、単語についてみると、《父》は地の文ではPatir、語りの文ではpatéras、《母》はmitir: mitéraとなっており、眼、家、水、道、手などもそれぞれ使い分けられている。そのほか、前置詞、語尾、与格の使用などにも使い分けが見られる。この他関係代名詞や動詞の活用その他にも違いがあり、地の文の中には、全くの古代ギリシア語の形もいくつか見られる。

ヴィジイノースに対し、その先駆者ランガヴィースでは地の文も会話の文も純正語である。1880年代というとプシハーリス（I.Psycharis, 1854～1929）が民衆語運動ののろしをあげた時代である。その実践として彼は1888年に『わが旅』を出した。そしてその後の散文作家は次第におしなべて民衆語で作品を書くようになる。ヴィジイノースの『わが母の罪』は1883年に出ている。まさに言語使用上でも過渡期の作家であったと言える。（なおヴィジイノースの詩の言語は、はじめ純正語で、のち民衆語に変わったということである。）我国明治時代中期の小説の文体と比較するのも面白い。

要するに、ヴィジイノースはその作品の内容においても、用いた言語においても、またそのおかれた時代や個人的経歴からみても、仲々興味ある作家だと言えるであろう。